

命の教育の実践における栽培活動の有効性と生徒指導

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース
106039 三田雅江

命の教育の実践における栽培活動の有効性と生徒指導

三田雅江

生徒指導力高度化コース

要約:命の教育とは自分が生きていることを実感し、自分の存在意義を感じることができる教育である。体験活動としての栽培活動は自分の存在、命の大切さを実感するために、児童生徒が自分で命を育てる経験をするという意味で重要である。栽培活動の有効性を追究するために、京都教育大学環境教育実践センターでの小学生の親子を対象にした栽培体験教室、京都市立花山中学校の菜園活動、奈良少年院での農園芸実習、京都市立新町小学校の栽培活動を研究の対象とした。栽培活動により児童生徒が主体的に興味・関心を持ち、協力、協働することで『生きる力』の育成や生徒指導の目的である自己指導能力、生徒指導の三機能である自己決定・自己存在感・共感的な人間関係に結びつき、積極的な生徒指導が行えることを考察した。

キーワード: 命の教育 存在意義 栽培活動 生きる力 自己指導能力 自己決定 自己存在感 共感的な人間関係 自己有用感 積極的生徒指導

第一章 研究の背景

第一節 学校教育の役割 『生きる力』の育成と命の教育

現実の社会において自分が生きていることの意味、生まれてきたことの意義を感じながら生活している人は極めて少数だと感じるが、自分の生き方を自分で決めていこうとする過程にある児童生徒には、敢えて自分の生きていることを実感しながら生きてほしいと思っている。児童生徒を取り巻く現実社会は日々変化しており、その中で生きていくには、今自分が何をしなければならないかを常に自覚できることが生きていることを実感することではないだろうか。

生きていることを実感できるためには、児童生徒が生活の中心になる学校教育の役割を再確認する必要がある。児童生徒が学校教育の中でかけがえのない一人の人間として大切にされ、自らの存在を必要とされていると感じることができ、存在感と充実感を味わえる教育をめざしていかなくてはならない。

『生きる力』の育成、命の教育とは何かを考えてみたい。学校教育の中での『生きる力』といえば、学習指導要領の理念である「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康・体力」の知・徳・体のバランスのとれた力が思い浮かぶ（文部科学省 2008）。この学習指導要領の理念の中で考えれば、学校教育の中で自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心の育成をめざす「豊かな人間性」

を『生きる力』の根本として、「確かな学力」の自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動することを目標とすべきであろう。次に、学校教育における『生きる力』を認識するために、命の教育は何かも明らかにしておきたい。

命の教育とは、自分が生きていることを実感し、自分の存在意義を感じることができる教育だと考えている。すなわち、自分の命が時を超えて様々な命のバトンを繰り返し、今の自分の命につながり、これから未来に続いていくかけがえのない存在であることを児童生徒が自覚できる事を目指すのが命の教育であり、その命の尊さの為に今できること、しなければならぬことを児童生徒が自ら判断し、行動していこうと主体的になれる教育であろう。『生きる力』の育成と命の教育は、自らの存在を実感したうえで、児童・生徒自らが主体的に生きていけるように導くことで共通している。そのためには、自己の生き方についての指導を行う道徳を充実することが重要とされ、これは学習指導要領における道徳の目標にもなっている。自他の生命の尊重、自分への信頼感や自信などの自尊感情や他者への思いやりなどを養い、主体的に判断し、適切に行動できる人間を育てることが「生きる力」の育成につながるのではないだろうか。

体験活動としての栽培活動は自分の存在、命の大切さを実感するために、児童生徒が自分で命を育てる経験をするのが重要である。この栽培活動で自分の生きていることを実感し、自分の存在意義を感じることができ、児童生徒が協力、協働、思いやりの精神を養い、お互いの信頼を築く関係を育成することが積極的な生徒指導に結びつくのではないかと考え、本研究主題を設定した。生徒指導との関連のためにも生徒指導の目的を次に明らかにし、規範意識についても確認する。

第二節 生徒指導の目的

『生徒指導提要』によると生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことであり、児童生徒自らが現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すとされている（文部科学省 2010）。社会的な資質や能力・態度を踏まえた個性の伸長と自己実現を指導・援助しながら、自己指導能力を育成するために、坂本（1999）は、自己指導能力を「その時、その場でどのような行動が適切であるか自分で決めて、実行する能力」と定義している。篠田（1999）は自己指導能力を形成する能力として、情報を選択する能力・問題を解決する能力・意思により決定する能力・感情を統制する能力・人間関係をつくる能力・思考能力の6項目を提示し、それらが総合的に関連する力とした。

坂本（1999）は生徒指導の三機能として「自己決定の場を与える」、「自己存在感を与える」、「人間的ふれあいを基盤」をあげている。国立教育政策研究所はすべての児童生徒に「自己存在感」を与え、児

児童生徒相互の「共感的な人間関係」を育て、「自己決定」の場や機会を設け、すべての児童生徒に自己実現の喜びを味わわせる取り組みを推進する必要があるとする。つまり、他者の主体性も大切にしながら、自らの主体性を大切にする自己指導能力の育成が不可欠なのである。自他共にかけがえのない存在として尊重し、社会の形成者として他者に尽くすという自覚、認識、意欲、態度等を培う必要がある。自分は社会にどのように貢献できるかを考えさせる必要があり、社会に役立つ自分の存在を自覚できれば、自分が社会に必要とされているという自己有用感が生まれる。児童生徒が、自己有用感を体験できるひとつが栽培活動であろう。児童生徒の自己指導能力が高まるよう、実体験の場や機会を設定して問題に対して自己決定を図り、その時、その場でどのような行動が適切であるかを自分で決めて、実行することができる心を育てる指導である積極的生徒指導こそが本来の生徒指導の意義である。まさに栽培活動が実体験の機会を提供しており、児童生徒が「自己決定」の経験や友達との協働作業により、自他共にかけがえのない存在として尊重し合い、相互に「共感的な人間関係」を育てることにつながると考えられる。『生きる力』の豊かな人間性の育成である他人とともに協調し、他人を思いやる心は生徒指導のねらいとしている自己指導能力につながるのではないだろうか。

規範意識をはぐくむ生徒指導体制として平成 18 年には教育基本法が改正され、第 6 条において、学校教育の実施に当たっては、「教育を受ける者が、学校生活を営む上で必要な規律を重んじる」ことを重視しなければならないとされた。さらに、平成 19 年の学校教育法の改正でも、第 21 条において、規範意識をはぐくむことなどが義務教育の目標として掲げられた。平成 20 年の中央教育審議会答申は、「子どもたちに、基本的な生活習慣を確立させるとともに、社会生活を送る上で人間として持つべき最低限の規範意識を、発達の段階に応じた指導や体験を通して、確実に身に付けさせることが重要である」と指摘した。今回の学習指導要領改訂では、「集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの体験活動を生かすなど、児童の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと」としており、道徳性の育成にかかわる体験活動を積極的に取り入れることを求めている。特に今回は、体験活動の例示として「集団宿泊活動」が加わったのが特徴である。集団宿泊活動の教育的役割としては、基本的な生活習慣の育成、協力する態度や集団のきまりを守る態度の育成、学ぶ意欲や学習習慣の育成などが期待されており、具体的には集団遊びの中でのルール作り体験、地域の人との交流の体験、職場体験、学習合宿体験等が展開されていくとしている。

住田（2011）は社会的な規範・態度、道徳性を形成していく過程を規範的社会化といい、実際の具体的な行動を通して行われ、「行動による教育」とする。栽培活動は児童・生徒が自ら体験する行動による教育である。住田（2011）は、学校教育は学級活動、児童会・生徒会活動、学校行事など集団の中で行われ自分で自分をコントロールし、自分自身を方向づける能力が「自己指導能力」であり、「自己指導能力」

は「自己形成」の中心である、と述べている。「自己形成」には、安定的、受容的かつ多様な人間関係を作れることが重要とされ、自己に対する多面的な視点を持つことができるとされる。そして児童・生徒が自己受容でき、自己を肯定できるような環境が必要である。栽培活動で作業を協力・協働することにより児童・生徒がお互いの存在を認め合い、共感的な人間関係を持つことができるようになると考えられ、これは生徒指導の三機能を果たすことになるといえるだろう。

第二章 研究の目的

児童生徒が、自分が生まれてきたことの意義を感じ、自分の存在意義を自覚できる命の教育を実践するために体験学習である栽培活動の有効性を追究するべきだと考えている。本研究では以下の①～④を目的とする。

- ① 京都教育大学環境教育実践センターにおける「野菜や草花を栽培して育てる楽しみや不思議さ、大切さを学習する体験教室」での実践およびアンケートから、栽培体験活動の効果と気持ちや行動の変化を明らかにする。
 - ② 京都市立花山中学校の菜園活動を見学し、校長先生からの実践の聞き取り及びアンケートから、栽培体験活動の効果と気持ちや行動の変化を明らかにする。
 - ③ 奈良少年院での農園芸実習を見学し、法務教官からの実践の聞き取りおよび院生の農園芸活動をおこなったことによる心情の変化を明らかにする。
 - ④ 京都市立新町小学校の栽培活動を見学し、校長先生からの実践の聞き取りから、栽培活動の意義を明らかにする。
- ①～④の実証を行い、今後の学校教育での命の教育の実践である栽培活動と生徒指導との関連を考察したい。

第三章 研究の方法

研究1 京都教育大学環境教育実践センター

「野菜や草花を栽培して育てる楽しみや不思議さ、大切さを学習する体験教室」

この栽培体験教室は小学生の親子を対象にして、トウモロコシ、ピーナッツ、サツマイモ、コカブ、ハウレンソウ、コマツナ、草花の挿し木などを育てることを児童が体験することで生きているものすべての命の大切さを感じる経験をめざす実践活動である。

活動の終了時に参加者に対するアンケート調査を平成 22 年 12 月（30 名）、23 年 12 月（30 名）、24 年 12 月（29 名）の 3 回実施した。保護者へのアンケート項目は (1) 栽培体験教室の効果について (2) 児童の気持ちや行動の変化について、あてはまるもの（複数回答可）に○をしてもらい、(3) 感想や気づいたことを自由記述とした。以下に表 1 にアンケート項目を、図 1 に栽培体験教室の効果について、図 2 に気持ちや行動の変化について示す。

表 1. アンケート項目

(1) 栽培体験教室の効果について

- A 自然や生き物への興味・関心を持つ
- B 自然や生き物に対する観察力・科学的知識を身につける
- C 自然や生き物を大切にすることが育つ
- D 食べ物への興味・関心を持つ
- E 食べ物に対する知識・理解が深まる
- F 食べ物を大切にすることが育つ
- G 作物を収穫する喜びや充実感を味わう
- H 農業への興味・関心を持つ
- I 農業に対する知識・理解が深まる
- J 汗を流して働くことの大切さを知る
- K 食の循環の重要性に気づく

(2) 気持ちや行動の変化について

- ア 協働・協力の気持ちが育つ
- イ 明るさや活気がでる
- ウ 創造力が向上する
- エ 表現力が向上する
- オ 情緒が安定する
- カ 積極性や自主性が育つ
- キ がまん強くなる
- ク 親子のつながりが深まる

(3) 感想や気づいたこと

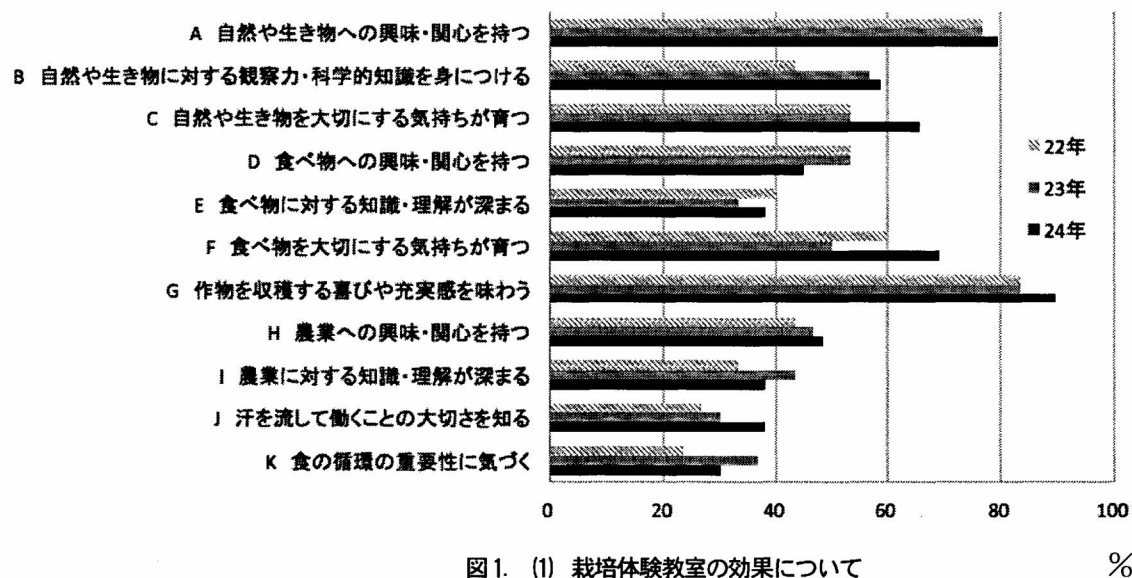


図 1. (1) 栽培体験教室の効果について

%

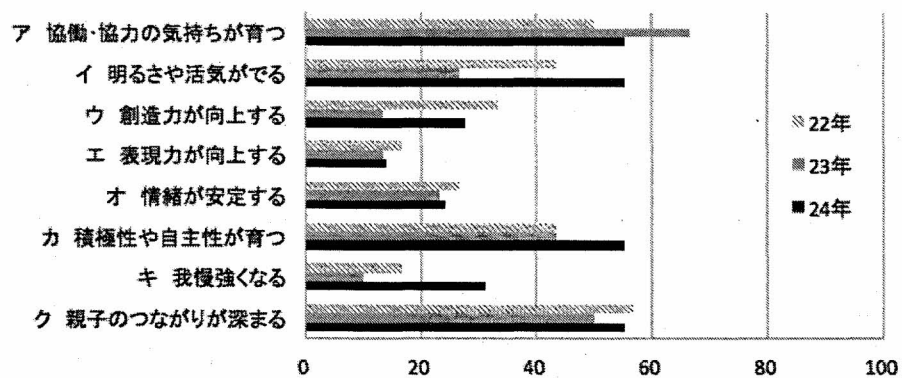


図2. (2) 気持ちや行動の変化について

%

(3) 感想や気づいたことの自由記述（抜粋）

○四季を感じ、生活し生きることなど本来日本人が必要としている大切な自然との関わりやリズムを知ることができました。○植物を育てることは生きていく上でとても大切なことであり、どの時期にどんな事をすればよいのか学べて良かったです。○こどもたちが伸びやかに楽しんでいる姿を見て自分を振り返る機会を得ることができました。○土にふれるということは情緒的にも豊かに育つと思います。○自然の中で子供の視点がか変わった。○たねまきから収穫まで体験できることで大切に食べることを学んだ。○自分の気づきや発見を楽しく話してくれるようになった。○野菜を育てることで命の大切さについて理解してくれたと思う。○親子で一緒に作業することができて共有の体験ができ、いい親子関係につながりました。

研究1の結果の考察

栽培教室の効果として図1に示すように、3年間の調査に共通して多い回答としてはG作物を収穫する喜びや充実感を味わう、A自然や生き物への興味・関心を持つに多く回答されている。

気持ちや行動の変化としては図2のように、ア 協働・協力の気持ちが育つ、ク 親子のつながりが深まる、カ 積極性・自主性が育つと回答されている。自由記述の「自分の気づきや発見を楽しく話してくれるようになった」は児童が栽培活動に主体的に取り組み、興味・関心を持ったことが表れ、「親子で一緒に作業することができて共有の体験ができ、いい親子関係につながりました。」は共感的な人間関係が育まれていることもわかる。

研究2 京都市立花山中学校の菜園活動

平成7年に生徒指導面で多くの課題を抱える中「問題行動の克服」と「学校の再生」を目指し、生徒の「自己矯正力」と「自治能力」を培うため「学校菜園作り」に取り組み始めた。特別活動と教科授業

に関連させ、地域の協力を得て土を耕すことによって生徒自身が自分も役に立っているという自覚を持てることで自分を振り返り、心を耕すように仲間や先生、地域に心を開き、荒れた学校が変化していったということであった。現在も年間を通して総合的な学習の時間において夏の収穫祭や冬の野菜を味わう会に向けて、継続的な栽培活動が校舎の空き地を利用して実践されている。地域の清掃活動にも参加し、東日本大震災への募金のため、収穫した野菜を販売するなど現代社会の課題の発見や解決にむけ、活動している。

収穫した野菜を販売し、東日本大震災への募金活動をおこなった中学2年生129名に平成24年11月アンケートを実施した。アンケート項目は京都教育大学環境教育実践センターでの栽培体験教室での保護者へのアンケート項目と同じ形式で (1) 栽培活動の効果について (2) 栽培活動をおこない、気持ちや行動の変化についてあてはまるもの（複数回答可）に○をしてもらい、(3) 栽培活動をして何を感じたか、何のためにしていると思うかを自由記述してもらった。以下に図3に栽培活動の効果について、図4に気持ちや行動の変化について示す。

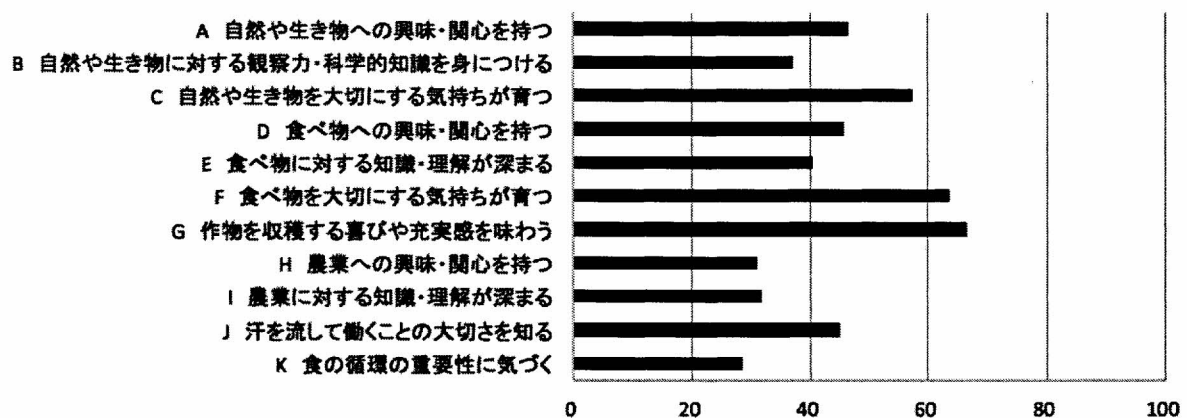


図3. (1) 栽培活動の効果について (中学生) %

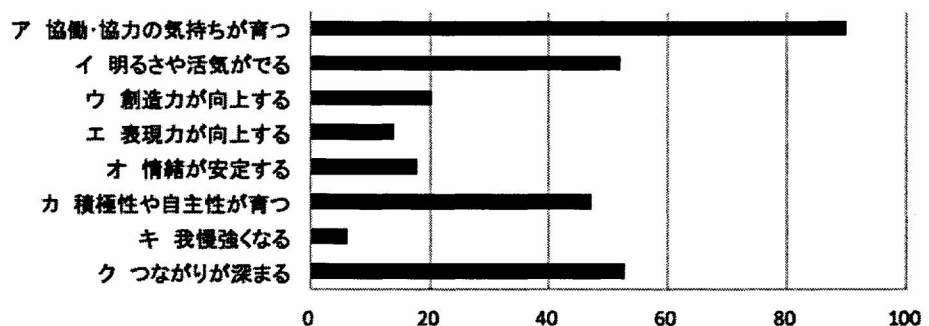


図4. (2) 気持ちや行動の変化について (中学生) %

(3) 栽培活動をして何を感じたか、何のためにしていると思うかの自由記述（抜粋）

○栽培活動をして食べ物のありがたみなどがわかった。○野菜などを育てることで協力でき、生き物の大切さが実感できます。○仲間との協力、親に対するありがたさを改めて感じられる時間をあたえてもらっている。○クラスメイト、先生などとのきずなを感じた。○協力しあいまわりの意見なども尊重し合える。○団結感が高まる。○栽培した野菜を売って募金したり、人の役にたっていることがうれしい。○野菜がよく育ったらとてもうれしいし、作った野菜が食べれるので喜び、充実感が味わえる。○収穫するときの達成感○一言で最高、自分で作った野菜を食べるのはとてもいい。○生き物に対する「愛」が生まれた。○野菜への興味がわき、自然と関わる機会も増えたと思います。

研究2の結果の考察

栽培活動の効果として図3に示すように、G 作物を収穫する喜びや充実感を味わう、F 食べ物を大切にする気持ちが育つ、C 自然や生き物を大切にする気持ちが育つに多く回答されている。

気持ちや行動の変化としては図4のように、A協働・協力の気持ちが育つ、クつながりが深まる、イ明るさや活気が出る、力積極性や自主性が育つに多く回答されている。自由記述の「栽培した野菜を売って募金したり、人の役にたっていることがうれしい」には自分が栽培した野菜を販売して募金を集めるなど栽培活動は収穫が成果として存在し、自分で行動した効果を、実感しやすいことが表れている。

研究3 奈良少年院での農園芸実習

奈良少年院において農園芸実習は新入時教育が終わって、中間期教育の自分の問題解決や被害者への謝罪意識を養うために生活指導とともに矯正教育として行われている。農園芸実習で奈良少年院独自の「マイ畑」指導がなされている。「マイ畑」とは、奈良少年院の少年一人一人に個人単位であたえられた畑であり、作付け計画から収穫まで、『自己責任』において自主的に管理させる栽培活動である。

奈良少年院を平成24年5月に訪問し、法務教官の方に「マイ畑」の活動状況をおうかがいし、「マイ畑」を見学させていただいた。栽培活動である農園芸実習を通じて、行動の様子や栽培日誌の記録やアンケート結果の聞き取りから「マイ畑」を通じての気持ちの変化が現れている。その一部分を示す。

“雑草を取り除いているときに野菜の根を切ってしまい、「あっ、ごめん」とつぶやいている自分がいました”には、野菜を人に例えて生き物を傷つけることに対し、心から素直に謝れており、社会で攻撃的にふるまっていた少年が傷付けられる相手の気持ちを感じる契機となっている。

“土づくりや雑草抜きなど、手を抜けば抜いた分、野菜が成長しないといった問題が返ってくる”の言葉に現実から目を反らすことが自分自身に返ってくる影響が出ることを理解したことがうかがわれる。

“雑草抜きや畝立てなど、面倒だと思っていたことでも、やってみると想像していたよりも苦じゃないことを知ることができた”には自信がなく現実に立ち向かおうという勇気のなかった少年が雑草抜きなどの作業を実際にやってみることにより自信が出て自分の存在を自分で認められるようになった。

“「マイ畑」なので自分で工夫して「こうしてみよう」と考えるようになった”には自分自身が創意工夫をして野菜を成長させようとする向上心がめばえている。

研究3の結果の考察

法務教官へのインタビューの結果から「マイ畑」の栽培活動の効果として、自分で考え、自分で行動する力がつき、自主性・自発性が生まれる。自分の判断で物事に対処、解決しようとする自立性と自分に課せられた責任を果たそうとする責任感がめばえ、厳しい条件の中でもあきらめずに最後までやり遂げようとする忍耐感・集中力がつく。収穫した野菜ごとにマイ畑賞と名付けた賞状を渡され、社会で味わえなかった充実感・達成感を得られている。命の尊さ、生命の神秘にふれ、生命尊重の意識が生まれ、野菜にとって、自分が必要であるとの実感である自己存在感や自己有用感を感じ、野菜や畑への慈しみの心が、人や物へ向き始め、自分だけではなく人・物の存在そのものの大切さを自覚できる。

研究4 京都市立新町小学校 西賀茂農園栽培活動

平成24年10月初旬京都市立新町小学校を訪問し、校長先生から西賀茂農園での栽培活動の実践の聞き取りをおこない、10月下旬に5年生の稲刈りを西賀茂農園まで同行し、栽培活動を見学した。学校運営協議会と連携し、様々な体験でこそ培うことのできる豊かな感性を育てることを目標として総合的な学習の時間に7つの委員会のうち食育企画推進委員会が、栽培活動の支援を行っている。生きる力を支える「食」について見つめ直し、作物を栽培することで食べ物への感謝の気持ちを実感している。西賀茂農園での土づくり、草引き、水やり、収穫にいたるまで全学年がテーマにそった野菜を栽培している。

1年生は幼稚園連携で西賀茂農園での栽培活動を一緒に行い、収穫したトウモロコシでポップコーンパーティーをし、小学校への新入学に対する幼稚園児の不安の軽減につながっている。2年生はサツマイモの栽培において茶巾しぼり作りやサツマイモのつるの佃煮も地域の方に指導を受け、食材を無駄なく大切に食べることで命の大切さを学び、勤労感謝の会で地域の方に食べていただいている。3年生は大豆を栽培し、豆腐づくりを行い、「豆腐・大豆新聞」を作り、大豆博士をめざし、教科との関連をはかっている。4年生は府立大学や栄養教諭が連携して小麦についての学習テーマで活動がおこなわれ、5年生は稲を育てて60kgの収穫があり、家庭科で地域の方を招待し、交流している。6年生は、小豆を

栽培し、おはぎの餡にしたり、ナスビ、カブを地域の料亭でだしの取り方からの調理を学び、京都の伝統を伝える食文化の継承で地域理解や感謝の気持ちを育んでいる。

西賀茂農園までの移動は路線バスに乗り 20 分かかり、下車して徒歩で 10 分であるがこの移動も集団行動として公共交通を利用する時のマナーなど規範意識の育成に役立っている。

研究 4 の結果の考察

現地の農園の栽培体験活動の様子や校長先生からの実践の聞き取りから栽培活動を通して、命に対する関心が一層深まり、児童が今、自分がやらなければならないことを自分で判断できている。学校と地域が相互に働きあうなかで多くの関わり合いが生まれ、規範意識も育成され、興味・関心を持つことから児童自らが課題を見つけ、探究していこうとする態度が見うけられ、「生きる力」の育成に効果がある。

第四章 研究の考察

図 5 に示しているように京都教育大学環境教育実践センターの栽培体験教室の効果のアンケート結果から、栽培活動の効果としての「自然や生き物への興味・関心を持つ」ことは『生きる力』を構成する「確かな学力」の自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力につながると考えられる。「確かな学力」の育成ためには学習の取り組みの最初に児童・生徒自身が興味・関心を持ち課題を見つけることが必要であるため、特に小学生の保護者は栽培活動で「自然や生き物への興味・関心を持つ」ことに効果があると感じている。

京都市立花山中学校の栽培活動の効果のアンケートで「食べ物を大切にすることが育つ」「自然や生き物を大切にすることが育つ」が多く回答されていることについては栽培活動で実際に植物を育てたことにより、命の大切さに気がつき、命をいただくことに対して食べ物や生き物を大切にすることが育ったことがわかる。命のあるものを大切にすることは、その時、その場でどのような行動が適切であるか自分で決めて、実行する能力である自己指導能力や、規範意識につながっている。

栽培体験教室や京都市立花山中学校の栽培活動の効果のアンケートで共通して一番多くの回答があった「作物を収穫する喜びや充実感を味わう」ことは、自分が一生懸命努力し、育てたことで作物が成長し、食べられるまでになったことで、達成感があり、「食べる」喜びが充実感につながっている。また、自分の努力した行動で収穫した作物を食べた人から感謝されることで自分の存在を自分で確認し、自己存在感や役に立ったという自己有用感を持つことができ、生徒指導の三機能につながっているといえる。

栽培体験教室や京都市立花山中学校のアンケートで共通して一番多くの回答があった「協働・協力の気持ちが育つ」ことは、友達との協働作業により、自他共にかけがえのない存在としてお互いを尊重し、

児童生徒相互の「共感的な人間関係」を育てることになり、生徒指導の三機能につながる。すなわち、『生きる力』の「豊かな人間性」の自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心の育成をめざすことになる。アンケートで多くの回答があった栽培体験教室の「親子のつながりが深まる」、京都市立花山中学校の「つながりが深まる」においては、命を育てるという同じ目的を持って協力して栽培活動を行うため、お互いの存在が「共感的な人間関係」として築かれたことがわかる。

京都市立花山中学校のアンケートの自由記述からも自分が栽培した野菜を販売して募金を集めることは人の役に立っているという自己有用感を実感しやすいことがわかる。

奈良少年院の「マイ畑」での栽培活動は自分で考え、自分で行動する力がつき、自主性・自発性が生まれることで自己決定の向上につながる。栽培活動という作業を実際にやってみることにより自信が出て自分の存在を自分で認められ、野菜にとって自分が必要であることは自己存在感や自己有用感につながる。自分のすべきことを果たそうとする責任感は規範意識であり、あきらめずに最後までやり遂げようとする気持ちはその時、その場でどのような行動が適切であるか自分で決めて、実行する能力である自己指導能力を形成すると考えられる。

この研究の最初に命の教育とは自分が生きていることを実感し、自分の存在意義を感じることができる教育であると定義し、栽培活動の有効性を研究1～4において、アンケートなどをもとに分析した結果、児童生徒が自分の存在意義を感じる命の教育は生徒指導の機能の一部であり、栽培活動によって学校教育の役割である『生きる力』、生徒指導の目的である自己指導能力、生徒指導の三機能が連動していることが明らかになった。栽培活動を行うことで学校教育の役割である『生きる力』の育成や命の教育の目的を含んだ積極的な生徒指導が行われることになる。

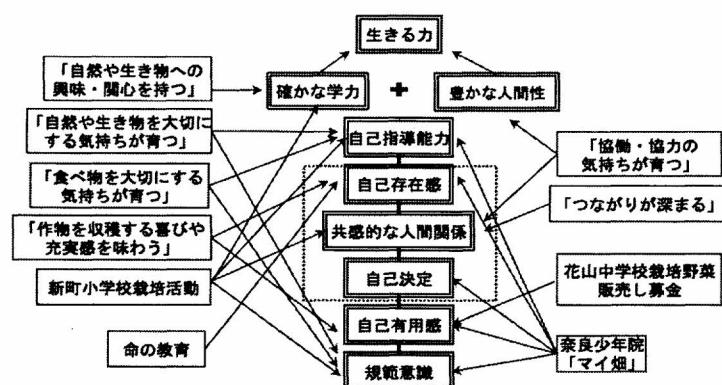


図5. 栽培活動と生きる力・命の教育・生徒指導との関連図

第五章 今後の課題

学校教育での栽培活動の実践に向けて最初にするべきことは、学校教育目標へ栽培活動の実践を標榜することである。これは、学校教育目標は学校全体で取り組み、どのような力をつけるかが明らかにされている学校教育での公約にもなり得る存在であるので、児童・生徒だけのものでなく、保護者・地域など学校関係者すべてに向けて栽培活動を『生きる力』の育成や積極的な生徒指導のために有効な学習活動として具現化するべきである。学習の取り組みの最初に児童・生徒自身自らが興味・関心を持つことが必要である。特に小学生の保護者は栽培活動で自然や生き物への興味・関心を持つことに効果があると感じていることからしても『生きる力』の「確かな学力」の育成に有効であることを提示することが重要である。

次に学校教育目標に栽培活動の実践を標榜することで、栽培活動の有効性の趣旨が理解しやすくなる。児童生徒の栽培活動には、保護者・地域の学校教育への積極的な協力・参加の柱として京都市立新町小学校の学校運営協議会のように地域の力を活用することが求められる。そして栽培活動を幼稚園・保育園連携で行い、小1プロブレムの予防をめざす。また、小学校6年生と中学生が栽培活動で交流し、中1ギャップ軽減への効果も期待でき、積極的な生徒指導につなげられるのではないかとと思われる。

栽培活動は総合的な学習の時間に実施する学校が多い。それに加え、特別活動の中の学校行事である修学旅行を農家へのファームステイ（栽培体験宿泊学習）で実施するべきだと考える。体験宿泊学習として実施することで栽培活動の実践の機会が高まる。栽培体験をするために教科を横断しての調べ学習を児童・生徒が主体的に自己決定でき、ファームステイ先の地域や学校との栽培活動を通しての交流や、ファームステイ後も産地の新鮮な農産物を宅配してもらうなど消費者にも便利で、地域産業の振興にも効果があり、共感的な人間関係の継続につながる。自然体験などに協力し合い支え合うなどして人間関係が深まり、命の大切さを学んでいじめ問題や不登校などが改善されているといった事例も多く報告されていることから生徒指導の支援にもなる。

栽培活動は『生きる力』の育成や積極的な生徒指導の要としての効果があることから、学校のすべての教育活動との関連を図り、実践を試みる必要がある。

参考文献 楠本恭久編 1999 『生徒指導論 12 講』 福村出版

坂本昇一 1999 『生徒指導が機能する教科・体験・総合的学習』 文教書院

住田正樹 岡崎友典 2011 『児童・生徒指導の理論と実践』 NHK 出版

中央教育審議会答申 2008 『「教育立国」の実現に向けて』

文部科学省 2008 『学習指導要領』 2010 『生徒指導提要』